地名の由来と史跡と文化財

菊間地区編

菊間地区八幡神社

上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会会員）

令和３年１月編集・製作

まえがき

人類は、今から７００万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約１０万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前１万４千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちはら」にも人が住み始めて３万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（ＨＵＴＩ）「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社と思われますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社と思われます。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていますが、水稲耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われています。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「菊間地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。

市原郡内菊間地区の地名の由来

千葉県の地名の由来

千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は７世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老２年（７１８年）に上総国から４郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語捨遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

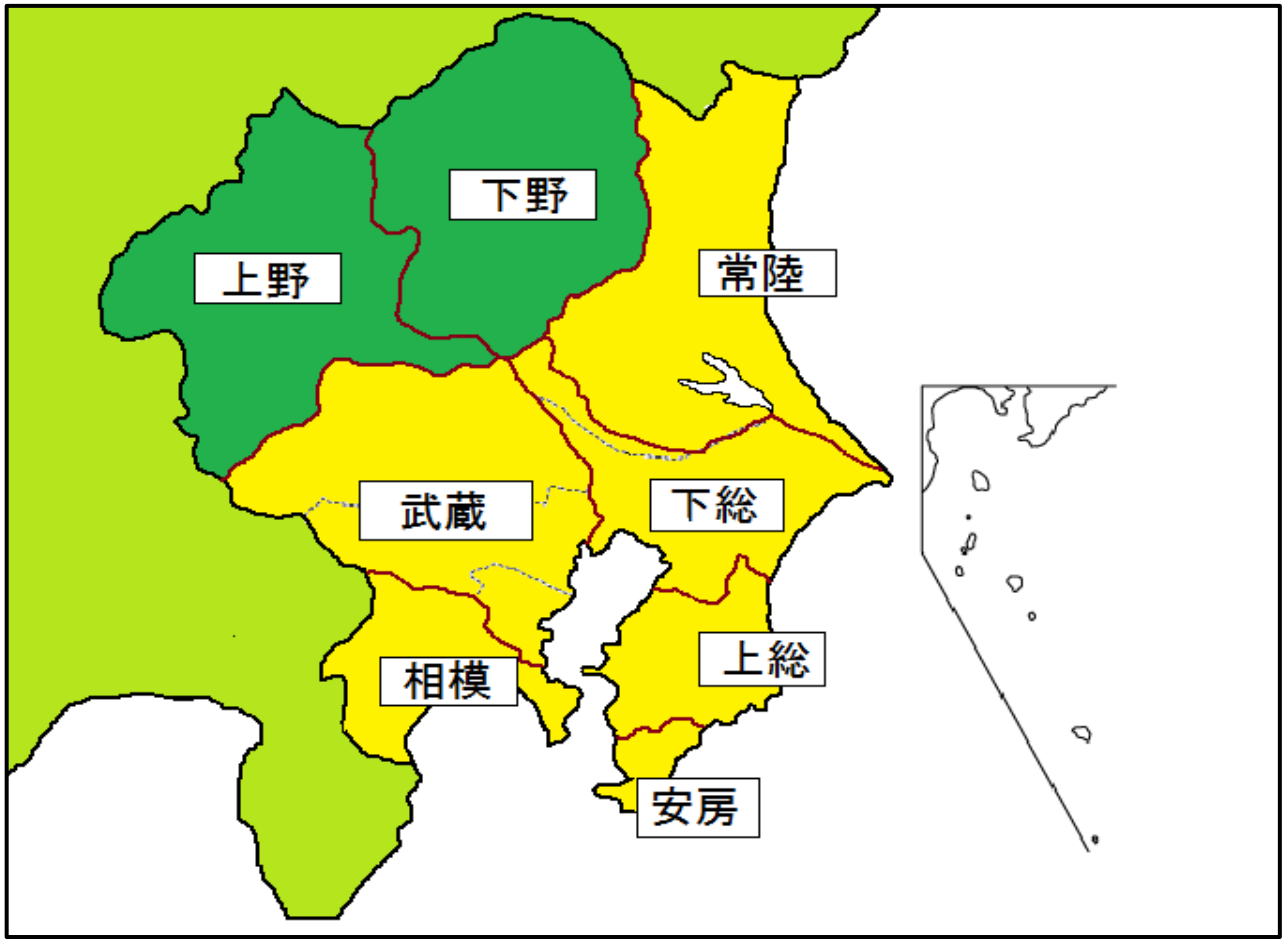
なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。

上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周淮（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の１１郡がある。

下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の１１郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の４郡で国造りがされた。

市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の６郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原

市原市の地区別地図

020/9/26　　行政区-scaled.jpg (1829×2560)

市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

上総国市原郡の６郷

１・海部郷（あまのごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

２・市原郷（いちはらごう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治２年（1659 年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

３・湿津郷（うるつごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な涌泉があることから命名された地名と思われる。

４・江田郷（えだごう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

５・菊麻郷（くくまごう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

６・山田豪（やまだごう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

菊間地区　（大厩・菊間・草刈・古市場）

概説

この地域の歴史は古く、古墳時代には菊間国造が置かれ、成務天皇の時大鹿国直が任ぜられた。市原市には数多くの古墳がある中で、前方後円墳を中心とする最も大きな古墳群は姉崎とこの地にあり、当時の繁栄を物語っている。また、大化改新後は菊間郷となった。

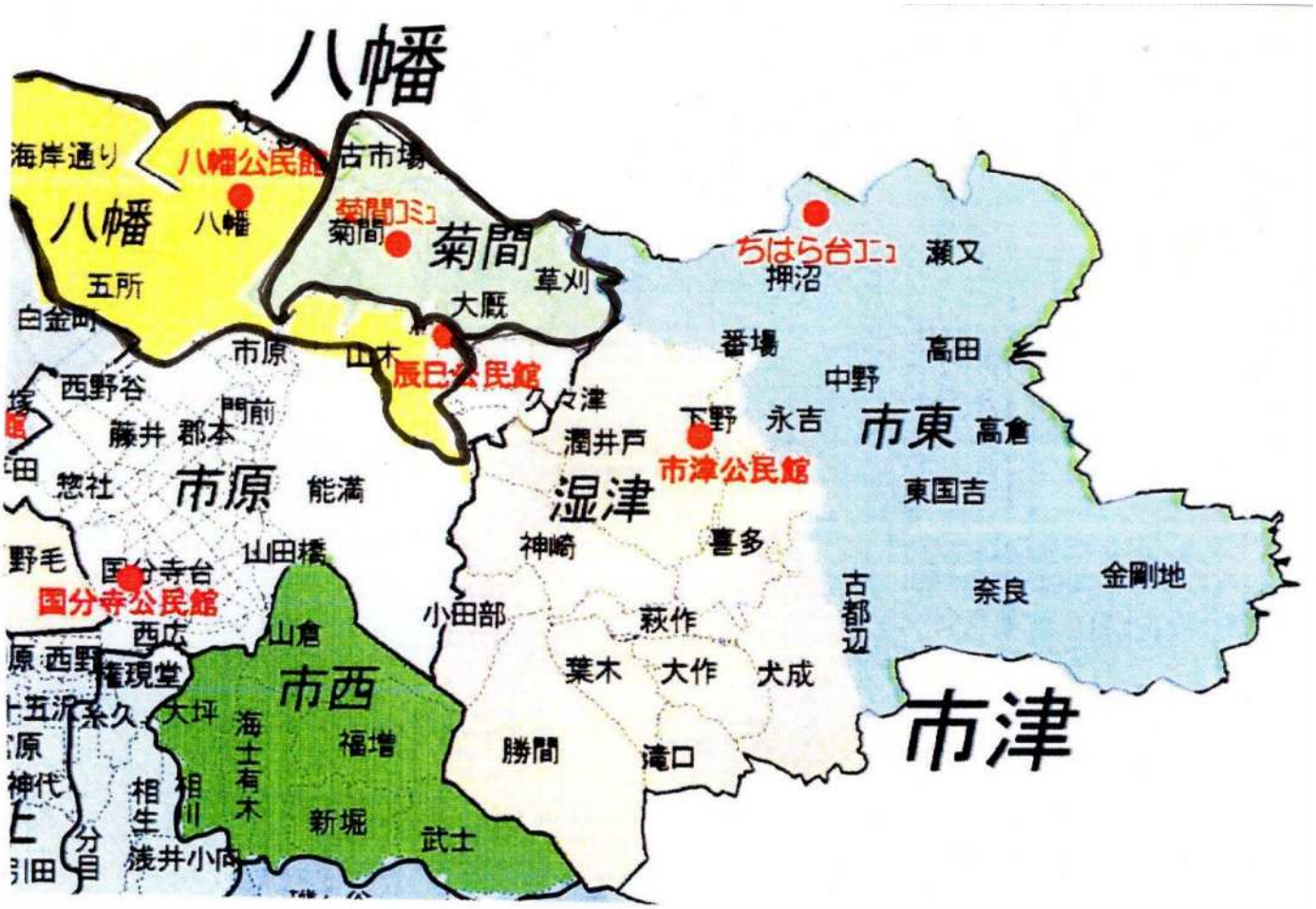
しかし、群雄割拠時代には地形上城域としての要素が欠けていたことから、ほとんど忘れかけられ上総土気氏の配下に帰していた。

江戸時代には、草刈が享保～天保の頃伊勢西城藩、後に五井藩領、幕末は鶴幕藩領であった外は、旗本領地として６人の代官により管理され、明治維新を迎えた。明治元年７月宮谷県に属し、同年９月水野忠敬が菊間村に居を構えて菊間藩とした。急な国替えだったため城を築く暇もなかったものの戦闘を考慮して四方水田に囲まれ、北には村田川の流れる台地に陣屋を設け、東西に走る道路は湾曲させ、水田に下る所は急坂としていた。藩庁は菊間忠霊塔の西南に隣接する字「雲の境」におかれ、移住当初は武家屋敷が軒を連ね、、旅館からすし屋、そば屋、湯場まで出来大変賑わったということである。近年まで徳永台などに武家屋敷が数件残り、当時の面影を伝えていたと言われている。忠敬は教育にも熱意を示し、菊間移住と共に沼津時代の校名を継承した「明親館」を開校し、これが明治５年の学制発布の後に「菊間小学校」となった。また、藩士族への授産として養蚕伝習所を設けて養業を起こし、全村に普及させた。

明治４年７月の廃藩置県により菊間県に属し、同６年に千葉県に属した。その後 11 月に郡区町村編制法施行の際、菊間・古市場・大厩・草刈の４村が連合を組織し、明治 17 年戸長役場所管区域の更定によって山木村が加えられた。同 22 年の町村制度実施により菊間・古市場・大厩・草刈の４村合併し菊間村となった。

村役場は、菊間藩の医局に設けた。しかし、明治 33 年に雨による災害を受け、一時福寿院に仮設し、明治 45 年に字樋口に新築した。

昭和の時代を迎え、昭和 30 年に八幡町と合併し市原町となる。



大厩　（おおまや）　神社・寺院・史跡文化財・城址　駒形神社・琴平神社・延命寺（真義真言宗）
大厩古墳群・大厩遺跡群

大馬屋とも書く。江戸期は大馬屋村。地名の由来は、「おお（美称）・まま（崖）・や（谷）」の転訛で、崖のある傾斜地という意味。

琴平神社　（ことひらじんじゃ）

所在地	市原市大厩字新田 1161 番地３
創建時期	不詳
祭神	金山彦命
宮司	天羽　忠浩
由緒・伝説	不詳

琴平神社本殿

本殿入り口のに御神木

本殿の左側を撮影

本殿内部にご神体が鎮座

駒形神社　（こまがたじんじゃ）

所在地　　市原市大厩字本郷 947 番地

創建時期　　創建年代不詳

祭神　　保食神・稲倉魂命・大宮姫命・大己貴尊・太田姫命

宮司　　天羽　忠浩

由緒・伝説　　旧村社。創建年代不詳。昔は字大宮にあったが、天正年間（1573 年～1593 年）に遷座したという。昔は参拝すると出兵を免れるという迷信があったという。境内に津嶋牛頭天王（石祠）や八坂神社・水神社（美豆波女命）・山神社（大山祇命）がある。

駒形神社拝殿と元文 5 年奉納の狛犬

享保 3 年に奉納された鳥居

拝殿と本殿をつなぐ幣殿

駒形大明神と書かれた扁額

津嶋牛頭天王の石祠

享保 8 年に奉納された手水鉢

子安大明神・天満宮などの祠

無動山延命寺　（ぶどうさんえんめいじ）真義真言宗

所在地	市原市大厩 1018 番地
創建時期	江戸時代初期と思われる
本尊	不詳
住職	川俣　宥全
由緒・伝説	創建時期は不詳ですが、山門入口の石の寺標には天明４年（1785 年）３月と刻まれている。市原郡四国八十八か所霊場の 87 番札所となっている。

延命寺の本堂全景

参道の階段と山門

朱塗り鮮やかな山門

無動山と書かれた扁額

本堂内の祭壇、中央に本尊

江戸時代からの墓石群

延享年間の墓石の宝篋印塔

大厩館跡

所在地	市原市大厩字堀之内
築造時期	戦国期と思われる
築造主	大厩藤太郎と思われる
説明	大厩館は村田川左岸、標高８，５ｍの微高地に立地されていた。館の範囲は一辺約２５０ｍの方形で、「堀の内」「本郷」「屋敷」「沼の門」「門」「家ノ下」などの城館に関連する可能性のある字名が残っている。別記航空写真は耕地整理される以前のモノであり、地表面の状態から城館跡の存在を示す重要な資料で、水堀の痕跡などが写っている。

大厩館のラフ図

大厩館と大厩氏

1565 年（永禄８年）２月 12 日、小田原の北条氏は酒井氏の本拠土気城を攻めた。この時土気城主酒井胤治が援軍を求めるべく越後の上杉謙信の家老河田氏にあてて出した書状が残っている。そこに「於宿城白井衆、原弥太郎、渡辺孫八朗、大畑半九郎、大厩藤太郎、鈴木始五十餘人討取候」とあり北条氏方の主力として酒井氏を攻めた原氏の配下の中の「大厩藤太郎」なる人物がいたことはわかっている。大厩館が戦国期の居館であるとすると、この大厩氏の居館とする可能性が少なくない。

大厩の地は、原氏の居城「北生実城」の約 4km南で、村田川河口近くに位置している。原氏の勢力圏内にあり、かつ内房から土気を経て外房に至る水運ルート沿いにある点から見て、人員物資を供給、輸送することなど 1565 年の土気城攻めに重要な役割を果たした地域のひとつであった。

大厩館の跡地の航空写真（1974 年耕地整理前）

大厩古墳群

大厩地先には縄文時代から平安時代に築かれた古墳や貝塚などの遺跡が数多く残されている。これらの遺跡は市原市文化財センターにより発掘調査が行われているが、宅地造成や耕地整理などで消滅してしまったものもある。ここでは発掘調査で判明した古墳や貝塚などの遺跡の紹介をします。

大厩古墳群、（所在地本郷・赤ホッケ）（２号墳・３号墳・４号墳・５号墳・16 号古墳・15 号墳・17 号墳・大厩東古墳群所在地・花輪（１号墳２号墳・３号墳４号墳・５号墳・６号墳・７号墳・８号墳）大厩二子塚古墳（所在地細野）・大厩浅間様古墳（所在地川上台）大厩細野貝塚（所在地細野）・辰巳大東遺跡・辰巳台遺跡などがある。

以下紹介する古墳や遺跡は、発掘調査記録が入手できたものを記載します。

大厩浅間様古墳　（おおみやせんげんさまこふん）

所在地　　市原市大厩川上台 1395 番地 1

埋葬者　　不詳

築造時期　　4 世紀後半

古墳形式　　円墳

規模　　直径４５ｍ　高さ７～９ｍ

説明　　墳丘は単純な円形をしており、円墳と呼ばれ、全国の古墳の中で最も多数を占める古墳形式です。

墳丘の規模は墳丘の径が４５ｍで高さ７～９ｍです。

大厩浅間様古墳の円墳

基本的には土が盛られて造られたもので、1500 年余りの年月の風雪に耐えながらも、自然崩壊などもありますから、造築当時の寸法とは限りません。墳丘の周囲には幅１３ｍの周壕があります。1990 年に発掘調査が行われ、出土したものとして第一主体とよばれる割竹形木棺からは「珠文鏡・石釧・刀子・璃璃製勾玉・琥珀製勾玉・琥珀製栫玉・琥珀製丸玉・小玉・璧玉製管玉・ガラス製勾玉・ガラス製三連玉・ガラス製小玉などが知られている。２主体からは木棺で出土したものは「短剣・ガラシ製小玉・滑石製臼玉などがある。第３主体からは木棺で出土したものは横形鉄器・鉄鏃・滑石製臼玉などがある。

大厩二子塚古墳　（おおまやにこずかこふん）

所在地　　市原市大厩細野 1178 番地

埋葬者　　不詳

築造時期　　古墳時代（4 世紀中葉～後半）

古墳形式　　前方後円墳

規模　　墳長７０ｍで後円部は直径４０ｍ、高さは約７ｍあり、前方部より１，７ｍほど高くなっている。

説明　　大厩二子塚古墳は発掘調査は行われていませんが、平成 6 年に墳丘の測量調査が実施され、その規模や形状から古墳時代前期後半頃の築造と思われる。この古墳の副葬者は、当時の首長の墓一つです。近隣には多くの古墳が点在するのもこのころの首長の墓です発掘調査は行われていないので、葺石や埴輪、副葬品などは確認されていない。

大厩東第５号墳

所在地　　市原市大厩字花輪

埋葬者　　不詳

築造時期　　古墳時代

古墳形式　　方墳

規模　　１５，５ｍ×１，５ｍの方墳

説明　　村田川水系にあり、古墳時代中期に築造された方墳で、現在は宅地造成により消滅。出土品としては、鉄剣や玉類、土師器などが出ている。

辰巳台遺跡群　（たつみだいこふんぐん）

所在地　　市原市大厩辰巳原

時代　　縄文・弥生・古墳・奈良・平安期

遺構概要　　集落跡・貝塚・炉穴跡

発掘遺物　　縄文時代の土器（夏島式と阿玉台式）と動物遺存体（貝類）・弥生時代から奈良・平安時代までの土師器が出土している。

菊間　（きくま）　神社・寺院・史跡・城址　八幡神社・弁財天・福寿院跡・戒聖寺（真言豊山派）・千光院（真義真言宗）・菊間古墳群・菊間遺跡群・菊間藩跡

戦国期は菊間之郷。江戸期は菊間村。菊間国造（くくまのくにのみやつこ）との関連が推定される菊間廃寺跡がある。地名の由来は、菊麻國（くくまのくに）にちなむ。「くぐ（屈）・ま（間）」で、村田川と丘陵に挟まれた屈んだような土地を指したものか。または、丘陵の内側の低湿地で降雨時に瑞が溜まりやすい土地いう意味。

若宮八幡神社の拝殿と狛犬と燈篭

若宮八幡神社（わかみやはちまんじんじゃ）

所在地　　市原市菊間字袖が台（若宮）3169 番地

創建時期　　白鳳２年（662 年）

祭神　　建甕槌命・日本武尊　相殿・大鵠鵜命

宮司　　天羽　忠浩

由緒・伝説　菊間八幡神社とも呼ばれる。武甕槌命と日本武尊は、白鳳２年（662 年）菊間国造で天穂日命 27 世の孫である大鹿国直により鎮座された。その後、建保年中（1213 年~1218 年）に千葉介平良文７代孫が上総国根本郷の領主となり、二男の重継が当社の宮司となった。

大鵠鵜命は治承４年（1180 年）に源頼朝の祈願により鎌倉から当社に合祀し若宮八幡と呼ぶようになった。境内にある銀杏の古木は本社創設の際に植えられたという。

境内末社は高良社（高良玉垂大神）・日吉社（大山咋神）・木兎社（武内宿禰）・痢瘡神・（素戔嗚命）・赤疱瘡神（石祠：大己貴命）・天照大神（石祠：天照大神）・道祖神（石祠：猿田彦命）・四所明神（字北野姫塚）；石祠：住吉大神）・稲荷社（字北窪：稲蒼魂命）・琴平社（金山彦命）・天照大神の石祠は故あって他所より移し祀られている。

地元では拝殿に向かう前に「こちらに参る」と言う言い伝えがある。

神事には、１月 14 日に筒粥占がある。

参道入口に建つ大鳥居

神社本殿と手前は木兎神社の社

淡島神社社と朱塗りの鳥居

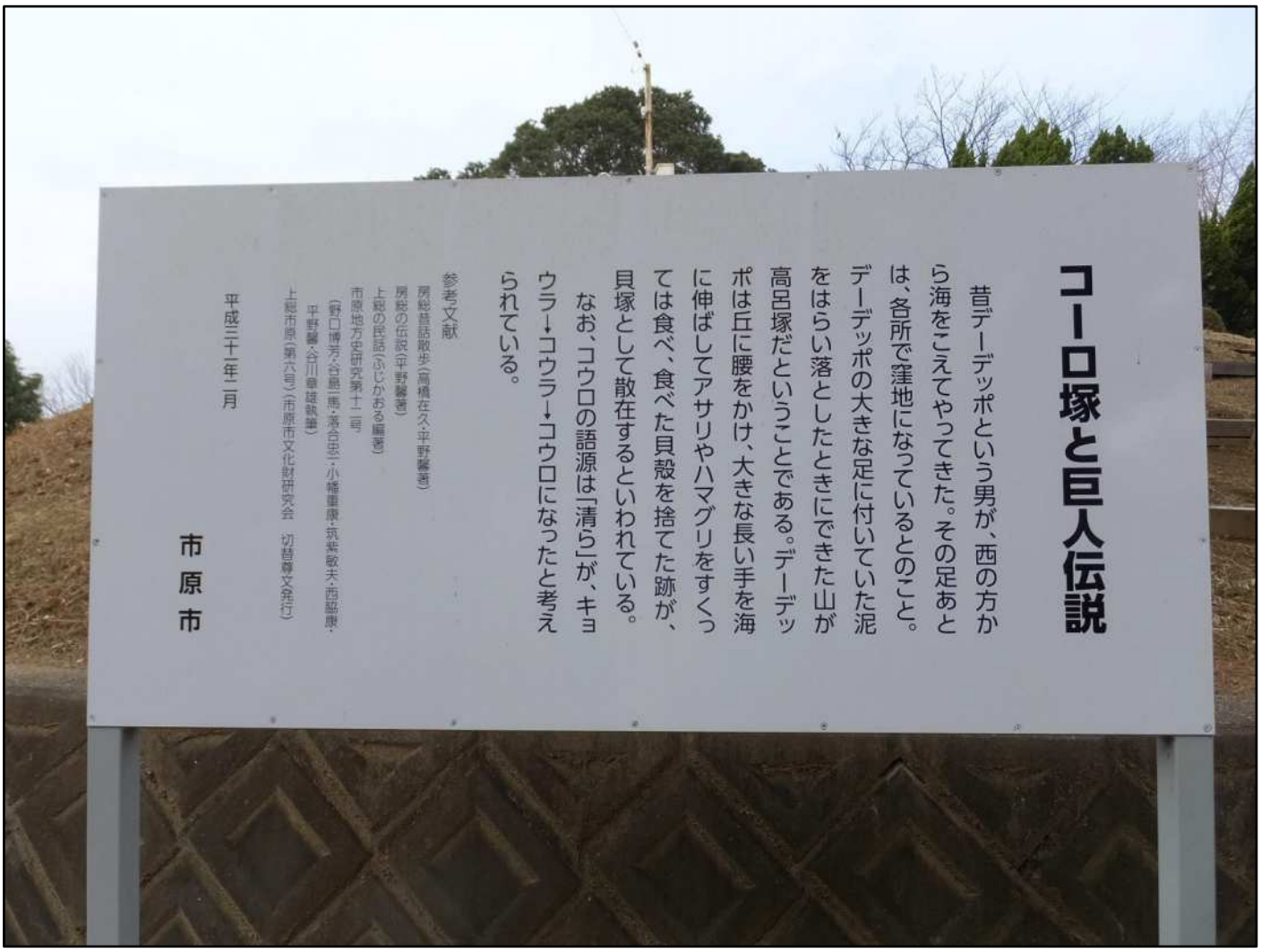
文政 13 年に築かれた神楽殿

天保 7 年に勧請された琴平神社

本殿左側、手前は拝殿の建屋

菊間弁財天　（きくまべんざいてん）

所在地　　市原市若宮７丁目２－１１
**　　高呂塚公園内（旧菊間村菊間字高良塚前）**
創建時期　　不詳
祭神　　市杵島姫命
宮司　　天羽　忠浩
由緒・伝説　創建年代は不詳ですが、往古高良神社を
**　　八幡神社境内に移した跡地に弁財天を**
**　　安置した。**



阿波能須神社　（あわのすじんじゃ）

所在地　　市原市菊間 2341 番地 1

創建時期　　不詳

祭神　　天比理刀咲命（洲崎大明神ともいう）

宮司　　天羽　忠浩

由緒・伝説　　阿波能須神社の祭神は天比理刀咲命で洲崎大明神ともいう。その夫天太玉命は、阿波神社の祭神であり、この二柱の神の子孫が天富命で、神武天皇の命を受けた天太玉命の斎部天日鷲命の子孫を率い、麻や穀物の栽培に適する土地を求めて阿波に赴きました。その一部が北上して菊間の地に定着し天比理刀咲命を祭神として先祖発生地の地名を取り阿波能須神社を造営祭祀した。

神社の祠と記念碑

延命山福寿院　（えんめいさんふくじゅいん）　真言宗豊山派

所在地　　市原市菊間 2004 番地

創建時期　　延徳 2 年（1490 年）に開基

開祖　　琢恵法師

本尊　　不詳

住職　　木下　榮弘

由緒・伝説　　延徳 2 年 3 月に琢恵法師により開基された福寿院は、「菊間村のお地蔵さん」と呼ばれ住民の信仰を集めた。「お地蔵さん」に纏わる逸話を数多く残されているという。市原郡四国八十八か所霊場の 86 番札所となっている。

福寿院の本堂全景

入口の山門、奥に本堂が見える

本堂内部と祭壇

子安様のお堂と石宝塔

普応山戒誓寺（しんおうさんかいせいじ）　（真言宗豊山派）

所在地　　市原市菊間 2367 番地

創建時期　　不詳

本尊　　不詳

住職　　山口　勝男

由緒・伝説　　開山時期等は不詳ですが、市原郡四国八十八か所霊場の 78 番札所となっている。

戒誓寺の本堂全景

寺院入口の寺標と太子の石像

本堂入口に掲げられる扁額

本堂内の祭壇と中央の御本尊

印内山千光院福壽寺（いんないさんせんこういんふくじゅじ）　真義真言宗

所在地　市原市菊間 2798 番地
創建時期　長享２年（1488 年）
本尊　不詳
住職　加藤　正信（第４1 世）
由緒・伝説　千光院の伝承によれば、鎌倉時代末期の正応５年（1292 年）に広済僧都が犬成の地に開基したが、長享２年日泰に帰依した土気城主酒井定隆の布令により、日蓮宗への改宗を余儀なくされた。いわゆる「七里法華」ですが、寺主はこれには応じず現在地に移転したと伝えられている。また、千光院の以前にあった地区は犬成説と喜多説があり、どちらが正しいかは不明です。当時の千光院は小本格の寺として下寺が８寺あり、本堂は間口 13 間（２３ｍ）奥行７間（１９ｍ）で、方丈は間口５間（１９ｍ）奥行４間（７ｍ）、庫裡は間口８間（１４ｍ）奥行５間（９ｍ）の建物だったと言われる。

千光院の参道と本堂。

天明の大飢饉の際に、千光院住職の宥将は、釈蔵院住職栄寛と明光院住職開演と共に、弘法大師９５０年遠忌の祈念と、豊作の祈願人心の救済を図るために、四国八十八か所を市原郡内北部の真言宗の各寺に移し、これを参詣すれば四国遍路と同じ功徳が得られると布教した。その一番札所が「釈蔵院」とし、千光院を８８番の札所とした。
明治初年に菊間藩ができ、藩主水野忠敬が沼津から移封され、仮の陣屋として使われた。明治７年の学校制度に伴い「菊間小学校」の仮校舎として開校したが、同９年５月１４日火災により堂宇を焼失したが、時の住職宥厳僧都が他の部落より譲受け移築した。
昭和４２年８月１０日に第４０代住職の太信により現本堂を建立した。

千光院入口の山門と石の寺標

本堂を右側から写す

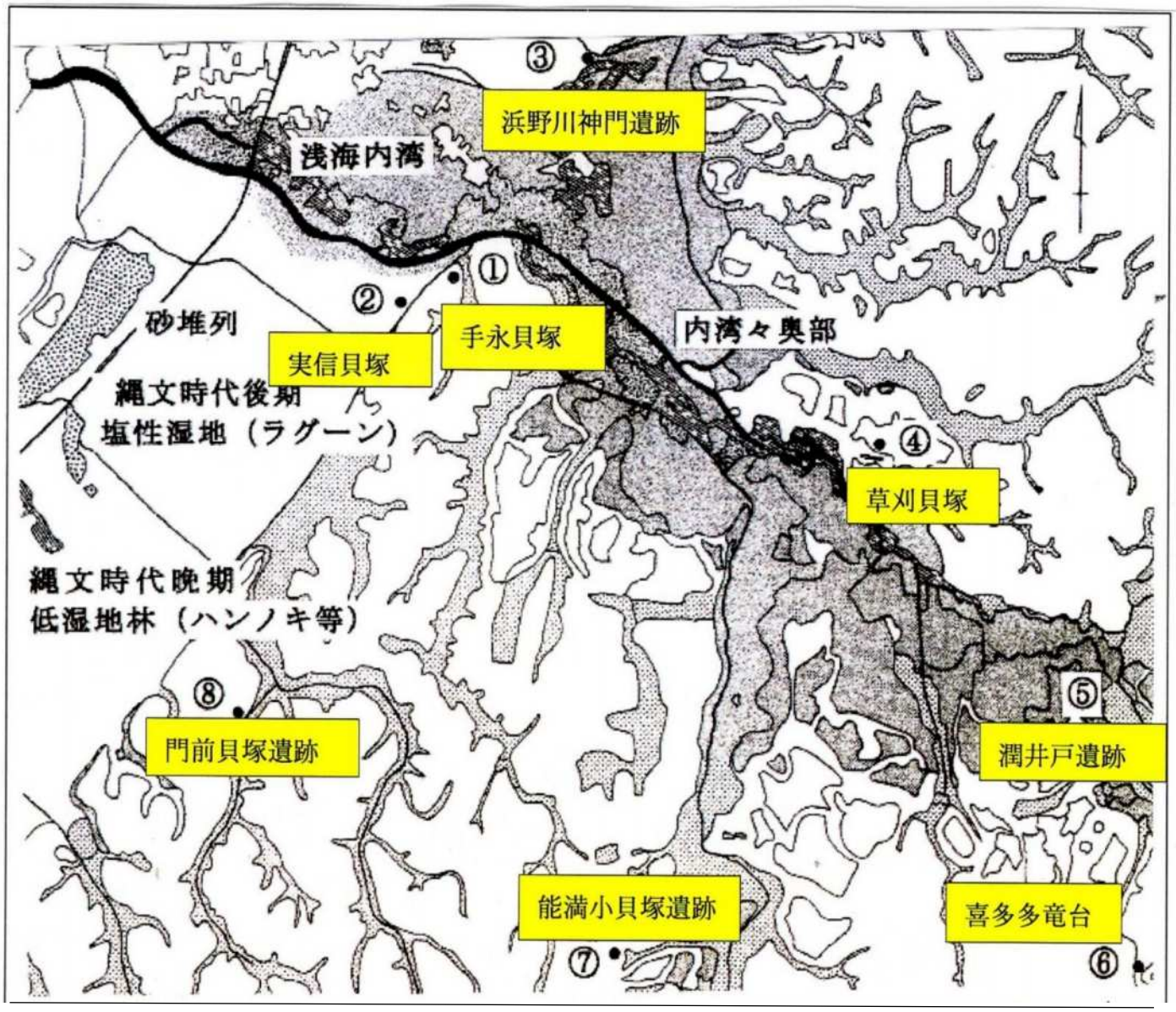
古い墓石を集め供養塚

菊間地区の古墳と遺跡について

菊間地域周辺には、縄文時代中期後半から後期にかけて、海岸平野に実信貝塚が形成されている。土器片を加工して作った土器片錘が多く出土している。そこで居住跡が検出されていないので、漁獲基地的のものと考えられ、豊富な漁獲があったと思われる。それは、台地からの土砂等が流入し海浜が拡大しできた平地と思われる。そこで取れた貝や魚を住居のある内陸に運び食したので、内陸部に貝塚が形成された。実信貝塚と同時期に台地上に菊間手長貝塚が形成されています。この二つの貝塚は、位置的に近い所から、大いに関係のあった貝塚と思われる。

弥生時代には、低地上に小区画の水田が広がっています。水田に繋がっていたと思われる溝からは、比較的まとまった土器が発掘されている。これらは弥生時代中期後半の宮の代式の土器です。縄文時代末期から弥生時代初期の出土物は少なく、土器などの変化も良くわかりませんが、実信貝塚からは、縄文時代終末期の土器や弥生時代初期と思われる土器が出土されている。また、低地上の小区画水田が営まれた弥生時代中期後半には、台地上の菊間手永遺跡や菊間遺跡で集落が営まれていた。しかしながら、低地上で方形周溝墓が展開する例は、弥生時代後期からは減少する傾向がとなり、台地の奥まった地域に拠点を移したと思われる。このことにより、海岸平野部より谷底平野部へと土地の利用対象の変化が見られる。

村田川流域の縄文時代の貝塚遺跡位置（１：５００００）



菊間地域３Ｄ地図　　古墳所在地位置図

菊間古墳群

菊間地区には多くの古墳が残されています。この古墳群は、菊間国造の残した権威の象徴として墳墓を築造したもので、ここではその中のいくつかを紹介します。

北野天神山古墳（権現山古墳）

墳頂部に天神様が祀られていて、地元の方の呼び名に合わせて北野天神山古墳と呼ばれている。現在は、前方部が削られ後円部の一部が残されている。

現道路の形状や境界などの残る土塁状の墳丘の残台から推測すると、全長９０ｍ程度の前方後円墳と思われ菊間古墳群の最大の規模の前方後円墳です

菊間天神山古墳（市原市指定文化財）

菊間古墳群の中でも市原台地北端にある。北側の眼下には村田川が流れ、西側には「市原条里制遺跡」がある海岸平野が望まれる。この古墳は、直径が３９ｍほどの円墳ですが、前方後円墳の可能性も考えられる。

北野天神山古墳や東関山古墳がある台地との間には谷が入り組んでいる。この古墳は、昭和５８年に周溝北側が発掘調査され、円筒埴輪片が出土している。また、タガ断面が余り突出せず幅広い台形であることから、古墳時代後期のものと思われる。また、周溝断面は深さ７０ｃｍ、幅９～１０ｍがあり、掘り込みが浅くなだらかに落ち込む形態は、出土埴輪と合わせて本古墳の帰属時期を決定する大きな要素と思われる。

東関山古墳

北野天神山に隣接しており、両方の古墳には明らかに築造時期差があると思われる。現状の墳丘長約７０ｍの前方後円墳で、菊間古墳群最大規模と思われる。現在は、東側には生活道路、西側には民家がせまり、墳丘裾がかなり削られたと思われ、全体的に細長い形になっています。前方部と後円部の比高差がほとんどなく、この古墳が古墳時代後期のものと思われる見解の根拠になっています。

平成５年に後円部東側周溝部付近の一部発掘調査をしており、上幅約１０ｍ、深さ２ｍの周溝が確認されたが、調査面積が少ないこともあり、東関山古墳の周溝であることの可能性と指摘する程度にとどまっている。

姫宮古墳　（市原市指定文化財）

姫宮古墳は、菊間古墳群の中で最も東側の市原台地端部に構築され伝承では、大正３年に村田川沿いの平野で近衛師団の実習を当時の皇太子、後の昭和天皇がこの墳丘上で観戦されたと言われている。北東側は墳丘裾部が一部削平されたと考えられる。墳丘長は５１ｍと推定され、古墳時代後期の築造と思われる。

菊間地区の文化財

若宮八幡神社社殿附棟札（市原市指定）

所在地　　市原市菊間３１６９番地

説明　　本殿は三間社流造、拝殿は間口３間奥行の３間の入母屋造りです。本殿の周囲には、延長２７間の玉垣が廻り、拝殿との間には１間１戸の瑞門があるなど、古式の神社配置様式を留めています。本殿・瑞門・玉垣は延享５年（１７４８年)、拝殿は天保４年（１８３３年）の建造と、棟札などに記されています。それぞれ当初の形態を良く保った本格的な神社建築です。

木造髄身立像（若宮八幡神社所蔵）（市原市指定）

所在地　　市原市菊間３１６９番地

説明　　神門に立つ守門神で一対の武神像です。
カヤ材の一本造りで、像高は各８８，４ｃｍ。
風化により表面の剥落や両手足先の欠失部分がある。
簡素な彫法、奥行のある頭体部の造りに平安風の趣が留められています。ただし、強い彫り口や矧ぎ材の当て方などから１３世紀の作と推定されている。
県下でも希少な随身像の古例です。

草刈（くさかり）　神社・寺院・史跡・文化財　　大宮神社・行光寺（日蓮宗）・草刈遺跡・草刈古墳群

江戸期は草刈村。江戸期までは馬などに与える草を刈る場や、屋根材の茅を刈る場所としていたので草刈という地名が付いたという説もある。

地名の由来は、「草（腐）・かり（崩壊地形)」で、湿地で崩れ地という意味。

里伝によると、天正１３年（１５８５年）５月１日深夜に本佐倉城内で、２３代当主千葉邦胤が家臣の桑田万五郎（鍬田孫五郎？）に刺殺されたと言う。犯行の動機は、新年の祝賀の席上、万五郎が放屁をしたのを邦胤が衆人の前で叱責した事を逆恨みして刺殺したという。万五郎は生実に一時潜伏していたが、菊間村でとらえられ、草刈村で斬首されたという。

大宮神社　（おおみやじんじゃ）

所在地　　市原市草刈字本郷１３３５番地

創建時期　　奈良時代ごろと思われる

祭神　　大宮姫命

神紋　　十六花弁菊

宮司　　天羽　忠浩

由緒・伝説　旧村社。創建時期は草刈遺跡群より見つかった奈良時代の土器の墨書に「草刈於寺杯」と記されており、約１３００年前に大宮神社が鎮座し

大宮神社拝殿と手前に燈篭と狛犬

ていたと思われる。
境内には、熊野神社（伊那邦岐命）・八坂神社（素盞嗚命）・御霊神社（日本武尊）・八劔神社（誉田別命）・天満神社（藤原道真）・大日神社（大日霊命）・日枝神社（大山咋命）山神社・明正神社が末社として境内にある。１月７日に行われる的射で年の稲作占いが行う神事がある。

神社入口の先には鳥居と拝殿が

大宮神社本殿と奥は拝殿

奉納された手水鉢と建屋

境内には多くの神社の社が建つ

この力石で怪力ぶりを試した

拝殿の入口には神社の幣額

法音山行光寺　（ほうおんさんぎょうこうじ）（日蓮宗）
所在地　市原市草刈１３２８番地
創建時期　室町時代後期大永２年（１５２２年）
本尊　不詳
住職　出口　幸祥
由緒・伝説　室町時代後期に開山した行光寺は当初は真言宗の寺院として開かれたが、土気城主酒井定隆の日蓮宗への改宗を余儀なくされた。いわゆる「七里法華」です。境内には檀家より多くの奉納された日蓮上人像や水手鉢、石燈篭などがあり、地域住民から信仰熱い寺院です。本尊は「本曼荼羅形式仏像」で、大小３０体を超える仏像が安置された祭壇は、大変豪華です。

行光寺本堂全景

行光寺入口に建つ山門と燈篭

鐘楼と釣り鐘

本堂の中には本曼荼羅の像が

檀家の寄付の日蓮上人の銅像

境内には数々の石碑が建つ

歴代住職の葬られている墓地

草刈遺跡群と古墳群

草刈遺跡の中に草刈貝塚がある。草刈貝塚は縄文時代中期（約４５００年前）を主とする遺跡で、市原市北部の村田川下流域右岸台地上に立地している。道路建設や区画整理事業に伴う発掘調査により、長径１３０ｍ、短径８０ｍの範囲から、中央広場とこれを取り囲む小竪穴１０００基以上（ドングリ等の貯蔵庫）・竪穴建物跡約３００軒などが発見されました。ドーナツ状になるこのような集落の姿は「環状集落」と呼ばれています。また、貝層は竪穴建物跡の窪みや南側の斜面部から、厚く認められました。
出土遺物は土器（阿玉台式前半から加曾利ＥⅡ式まで）をはじめとして、石鏃・石斧・石皿・磨石・土器片錘・耳飾り・垂飾り・骨角歯牙貝製装飾具などがあり、中でも土器片錘の出土数は全国一です。
また、埋葬人骨は多数発見され、装身具を付けた人骨が含まれることも特筆されます。
草刈貝塚は、全国調査された中期の集落としては県内最大規模とみられている。

草刈貝塚空撮写真（現在の市道「瓦窯通り」

発掘された石鏃各種

ヒスイなどを加工した錘飾

歯牙製装飾具

草刈古墳群

草刈古墳群は１８０基に及び、その多くは菊間国造の勢力を示すものと思われる。
その中で一号墳は、古墳時代中期前半に築かれた直径３５ｍを超える大型の円墳です。
そこから発掘された副葬品には、のこぎりや鉄斧・釜などの農工具と鉄剣や鉄鉾、鉄鏃の武器（南棺）、赤瑪瑙・ガラス玉・滑石製勾玉・などの玉類、銅釧・鉄のインゴット・鉄製農工具（中央棺）鉄剣と滑石製代玉（北棺）などの多様で豊富な副葬品が出土しています。

ちはら台中央公園にある古墳群紹介看板

草刈１号古墳の発掘調査全景

古市場（ふるいちば）神社・寺院・史跡・文化財　　八坂神社・天神社・長妙寺（日蓮宗）・武田家住宅

江戸期は古市場村。隣接する旧千葉市古市場と区別するため「上古市場」または、かつて当地の領主であった千葉一門の高島氏にちなみ「高島」とも称した。
地名の由来は、かつて市場が開かれていたことにちなむ。

八坂神社　（やさかじんじゃ）

所在地	市原市古市場字大気一里塚２９番地
創建時期	不詳
祭神	素箋嗚命
宮司	天羽　忠浩
由緒・伝説	旧村社。通称天王さま。創建年代不詳 由緒不詳。平成１０年に社殿再建された。

再建された八坂神社拝殿と燈篭

入口にある鳥居と狛犬、奥に社が

拝殿の奥には本殿が建つ

拝殿左わきには祠が建つ

天神社　（てんじんしゃ）

所在地　市原市古市場字宮前１１６番地

創建時期　治承２年（１１７８年）

祭神　藤原　道真

宮司　天羽　忠浩

由緒・伝説　旧村社。治承２年に千葉氏の家臣高島常重が勧請し建立された。境内には子安大明神（木花佐久屋比売命）・妙正大明神（素箋鳴命）・熊野権現（伊弉諾尊）が勧請されている。神事に１月２５日に的射による稲作占がある。社前にある「撫で牛の狛犬」は神社を守ると共に、人が自分の体の悪い所を撫でると治してくれると信じられています。

天神社拝殿と手前には牛の石仏の狛犬

入口に建つ鳥居と参道

奉納された手水鉢と建屋

本殿と拝殿を繋ぐ幣殿

拝殿入口に掲げられている幣額

子安大明神・妙正大明神・熊野権現の祀られた建物

本殿内部に祀られた祭壇

正念山長妙寺　（しょうねんさんちょうみょうじ）（日蓮宗）

所在地　市原市古市場９５番地

創建時期　１６００年代（江戸時代中期）

本尊　不詳

住職　川崎　英俊

由緒・伝説　創建時期は不詳ですが、江戸中期よりは以前と思われる。本堂は何度か火災に合い書類廻は焼失されており、由緒などは不明。

長妙寺の本堂全景

長妙寺の入口山門

本堂内部には本尊が安置

境内にある鐘楼と釣り鐘

武田家住宅

所在地　市原市古市場５３番地

文化財　国指定登録文化財（建物）

特色　和洋折衷の異色な建造物

説明　武田家住宅の本体は、大正５年に長生郡長南町に建てられていたもので、純和風の医院でした。その後、昭和３年に建物の左部分が現在地に移築され、昭和２７～３１年に本体を解体移築し、右部分に結合させました。その際、外壁は左部分の建物に合わせて白色の下見板張りに改修されましたが、屋根は瓦葺きのままだった為コントラストの美しい折衷形式とした。

本資料は、次の資料を参考に作成しました。

・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
・全国遺跡報告総覧
・日本の城郭・城址（千葉県版）
・歴史の旅人（市原の文化ガイド）
・市原市・宗教法人一覧
・かずさ国府はどこ？
・市原の城郭と国府跡をたずねて
・Wikipedia-　市原郡
・市原市歴史と文化財シリーズ
・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

市原の地名の由来と史跡と文化財
菊間地区編

発行・編集　市原の歴史を知る会

住所　市原市能満 1020 番地 1

連絡先　０９０－３５４５－１１１３前